



採鉱



運搬



生活文化

19  
まいん

ひうらつうどう

# 日浦通洞



昭和30年代撮影  
松浦 勲氏提供

まちとまち  
人と人を結ぶ通洞

## ひうらつうどう 日浦通洞

は、東延斜坑<sup>とうえんしゃこう</sup>から日浦谷<sup>ひうらだに</sup>を結ぶ輸送路です。

第三通洞と連絡したことで別子山側の日浦と新居浜側の東平<sup>とうなる</sup>が結ばれました。

明治41年(1908)9月に工事が始まり、3年の工期を要し、明治44年2月8日に貫通しました。

通洞の長さは延長約2,120メートルです。第三通洞と合わせると約4キロメートルとなります。

また、通洞内には端出場<sup>はでぼ</sup>にある水力発電所への導水路も設置されました。



現在の日浦通洞



昭和33年(1958)撮影  
日和佐初太郎氏撮影

© HATSUTARO HIWASA 1990

日浦通洞の貫通によって、鉱石など物資輸送が全て東延斜坑と第三通洞、そしてこの日浦通洞を経由することとなり、同年10月第一通洞内の鉄軌による牛車の鉱石運搬が廃止、これに伴い角石原選鉱場、上部鉄道、石ヶ山丈から端出場への索道なども廃止されました。

昭和13年(1938)からは、東平～日浦間に駕籠電車<sup>かごでんしゃ</sup>が運転され、一般の利用にも提供されました。料金は無料で、片道30分ほど真っ暗な中での乗車でした。

別子山と新居浜を結ぶ唯一の交通機関として重要な役割を果たしました。

当時、別子山から東平へ通学していた生徒が、台風で通洞が浸水し使用できなくなった際に、銅山越をしたという話が残っています。

注意！

橋の老朽化にともない、現在は橋を渡ることができなくなっていますのでご注意ください。

